

読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

『世界から猫が消えたなら』 川村元気 著

「幸せな結末」とは

情報工学科3年 杉山 咲

この本は、癌で余命僅かな主人公が、悪魔との取引で命を得る、一週間の物語だ。取引とは、「世界から何か一つ消す代わりに、一日生き延びることができる」というもの。電話、映画、そして時計。一日を重ねる毎に、当たり前にあったモノがない世界に変わっていく。

主人公は最終的に、猫を消さず、自分が死ぬことを選択する。その後の、主人公が身辺整理をしている場面。彼は、父からももらった切手を集めた箱を見つける。そこから、父との思い出が語られる。私は、読みながら、小さいときのことを思い出していた。キラキラしたプリキュアのシールを、何枚もランドセルのポケットに入れて、ずっと持ち歩いていたこと。女の子が魔法で可愛い洋服を作る絵本に憧れて、何度も何度も読んでいたこと。今となってはどこにあるかさえもわからなくなってしまったが、確かに彼らのことが大好きだった。幼い頃持っていたモノはみんな宝物で、今なら気付きさえしないようなガラクタでさえも、かけがえのない憧れだったはずだ。普段画面ばかり見ているから気付いていないだけで、今も変わらずそばにあるのだろうか。小さな身体で走り回る世界は、今よりも狭かったかもしれない。しかし、その世界は解像度も彩度も今より高く、とても輝いていたと思う。

本を読みながら取り戻した失くしかけの記憶は、とても素晴らしいものだった。それに対して、今の私はどうだろうか。将来の夢への具体的な手段を知った代わりに、夢を実現させることへのハードルの高さを理解してしまった。自分でできることが増えていく度に、将来への純粋な憧れが色褪せていく気がする。なんだか、思い出の自分とはもう違うのかと、心寂しくなってしまう。

それでも、思い出は自分の基盤として生きているのだと思う。主人公がいざモノを消そうというとき、必ず連鎖するように思い出が出てきた。周りのモノたちが、人との繋がりの中になっていて、「自分」というものを形作ってくれていたのだと、気付かされていた。それは多分、誰にとってもそうなのだ。世の中に溢れる程あるモノの一つ一つは、間接的であっても、何らかの形で誰かの人生を彩っている。人同士の関わりの中で、自分の人生の傍らで、寄り添ってくれるのが、モノなのだろう。そして、それらは将来の進路に影響したり、自分の感性の末端に、個性として表れていたりするのかもしれない。無意識のうちに、私の一部として、生きているのだろう。

「その死が幸せか不幸せかということは、どう生きたかということに関連する」。これは、主人公の言葉だ。最初は死にたくない絶望していた主人公が、自分の人生の中にあつたモノに触れ、思い出を振り返ることで、生と死にゆるやかに折り合いをつけていく。その中には、幸せな記憶もあれば、後悔として心の傷を抉るような記憶もあった。もしも、私が彼の立場になったとしたら。果たして私は、人生に幸福な諦めを付けられるのだろうか。幼い頃抱いていた未来への羨望に、折り合いを付けられるのだろうか。これまで過ごしてきた中で、向き合いたくない後悔も、直したいところも沢山ある。これからの人生を考えれば、なおさらだ。私の周りのモノたちが、自分をどう形作っていくのかはわからない。それでも、沢山のモノに触れて、自分だけの世界を彩っていったなら、それはきっと、将来の自分の幸せに繋がるはずだ。そしてもしも、主人公のように、命と引き換えてでも守りたいモノができたのなら、その人生は素晴らしく尊いものだと、胸を張って言えるだろう。

この本を読んだ後、人生の結末において最も近くにいるのは、思い出なのだと思う。モノによって彩られたその思い出を、最後に誇ることができたのなら、それは幸せな結末だろう。

優秀賞

『雪国』 川端康成 著

徹底的な美の追求

情報工学科3年 石村 涼介

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」。これほど有名な書き出しは後にも先にもまずないだろう。しかし、その後の展開を知る人は少ない。夏季休業中という季節感とかけ離れた「雪国」の二文字は、私の心を動かすに十分な迫力を放っていた。そして、その内容は身震いするほどの美しさと工夫に溢れていた。

主人公の島村は、雪深い温泉街で芸者・駒子と出会う。二人は惹かれ合いながらも進展はせず、もどかしい愛の様子が美しい景色と共に描かれてゆく。

まずこの物語に感じるのは、大きな展開がなく、二人を中心とした温泉街の日常が描かれることだ。主役の二人にはそれぞれ近い異性がいるが、三角関係に発展するでもなく、大きな修羅場も訪れない。このことから、著者は人の汚い部分や卑しい部分を極力省き、美しさのみを描きたかったのだと考える。

現に、著者は性に関わる場面を暗示的に表現している。例えば「あんなこと」と述べたり、「『こいつが一番よく君を覚えていたよ。』と、人差し指だけ伸ばした左手の握り拳を、いきなり女の目の前に突き付けた」と述べたりしている。これは、性と愛は切り離せないと理解した上で、美の邪魔にならないような工夫だといえる。この視点をもって改めて本書の書き出しを見ると、これは「トンネル」と「汽車」、そして白い「雪国」を用いた暗喩だと捉えることもできよう。

また、本作ではその幕切れも印象深いものである。二人の別れを暗示する描写がある中で、物語は火事の場面で唐突に終了する。しかも、火事の前は描かれず、まさに倉が燃えている状態での幕切れである。ここから私は筆者の意図を二つ汲み取った。一つは、この火事も暗喩だということだ。二人の愛が高まる中で、いつかその情熱は身を滅ぼすということを最終場面で暗示し、二人の行く末を描き切ったのだと考える。もう一つは、物語を美しいまま終わらせたかったということだ。前述した通り、本作は美しさに重きを置いている。したがって、二人が不幸になる前に、倉が焼け落ちて灰になる前に物語を終わらせたかったのだろう。

このように、本作は人と景色の美しさを追求し、完成された物語である。そして、美の追求にあたっては大きな物語の起伏を作らず、相反する描写には暗喩を施し、終わり方にも工夫を凝らすといった著者の強いこだわりが感じられた。日常の美しさを感じながら読むも一興、暗示の意味や二人の行く末を想像しながら読むもまた一興だろう。本作以外にも数々の名作を遺した川端康成氏の作品を他にも読みたいと心から思う。

『ジュラシック・パーク』 マイクル・クライトン 著

「ジュラシック・パーク」を彩った描写たち

物質化学工学科2年 寺田 歩生

一九九三年、スピルバーグの手により制作された映画「ジュラシック・パーク」。アニマトロニクスとコンピュータ・グラフィックスを駆使して描かれた、触れることさえできそうな恐竜たちの姿には誰もが心を躍らせたことであろう。私も迫力ある恐竜たちの姿に惹かれた一人であった。そのため自分にとって「ジュラシック・パーク」は素晴らしい映画という印象しかなかったが、中学生の頃原作があることを知り、古本屋で購入して読み込んだ記憶がある。当時は著者の独特な科学観、発達していく技術への警鐘など、物語のテーマに注目して読んでいた。しかし今になって読み返してみると、その描写の緻密さには目を見張るものがあると気づく。高度な社会風刺作品と見られがちなこの小説だが、私はあえて描写、そしてその細かさに着目してみたいと思う。

この物語の舞台は、遺伝子工学の力で蘇った恐竜たちの、動物園ならぬ恐竜園「ジュラシック・パーク」である。様々な専門家たちが視察のためコスタリカ沖の孤島に造られた「パーク」へ招かれ、ある事件が起きて脱走した恐竜たちに襲われる、というのが物語のあらすじだ。だが、物語は孤島ではなく中米コスタリカの診療所から始まる。恐竜がたくさん出てくる映画版のような展開を期待していた読者にとっては拍子抜けという感じであるが、次第にその緊迫感に魅了され、この場面が小説の世界に没入するきっかけとなるのだ。診療所に、恐竜に襲われた少年が運ばれてくるというこの場面の一連の描写、例えば「腐臭を思わせる、死と腐敗のにおい」「傷口にこびりつくねばねばした泡」には、実体験を描いたかのような細かさが見られる。私がまず惹かれたのは、このぞっとする場面をこれほど細かく描きながらも、くどさを感じさせないところであった。このような精密な描写は物語を通して続き、それが読者に次の頁が読みたいたと思わせる一因となっている。

物語の軸は手に負えないような技術を発達させていくことへの危機感にあるが、この作品では、それを作者の意図を読者に伝える媒体でしかないともいえる「恐竜」の描写にも抜かりない。「フクロウを思わせる、ホウホウというおだやかな啼き声」「体長は三メートル強、黄色い体表が黒い斑紋に覆われ、頭にはV字型の赤いとさかがついている。」これらは肉食恐竜ティロフォサウルスについての描写である。ティロフォサウルスの名を聞いてその姿が浮かぶという人は少ないだろう。つまり登場させなくても全く問題ない恐竜なのだ。これ以外にも、オスニエリアやヒプシロフォドンなど非常に知名度の低い恐竜が出てくるが、それらの描写は非常に緻密で創作ではあるが恐竜図鑑での姿よりも生き生きとしているとさえ思う。マイナーな恐竜でも描写を怠らないその描き方に恐竜マニアの私は感動を覚えた。コナン・ドイルの「失われた世界」などでただただ恐ろしい化け物として描かれてきた恐竜は、「ジュラシック・パーク」で遂に命を手にしたのである。

この小説に、暴走する科学技術の中で生きる我々現代人への警鐘を見た、という感想はよく見かける。しかし作者マイクル・クライトンの、創作だと高を括らず、主題とは関係のないようなところも含め精密に描写する真摯な姿勢にこそ学ぶところがあると私は思う。現代社会への警鐘という鋭い主題よりも、物語の各所に散りばめられた細かい描写、その元となる作者の情熱が、映画も含めたこの作品を不朽の名作たらしめているのだと実感した。

『桜桃』 太宰治 著

親と子供の価値

機械工学科1年 橋本 琳

「子供より親が大事、と思いたい。」、この言葉が『桜桃』を読了した後、ずっと私の頭の中で渦巻いている。『桜桃』では冒頭と最後で「私」が二回も「虚勢みたいに眩く」のである。

『桜桃』は太宰治の実際の家族をモデルにして書かれたとも言われている。主人公の「私」は、子育てや家事に一切関与しない人物で、妻にすべて任せていた。そして極端な小心者であるため、家庭での気まぐさには堪えられずいつも冗談を言いながら過ごし、小説家としてもへどもどしながら書いている。「私」と妻は互いに機嫌を損なわないように相手に合わせ、言い争いさえした事さえ無いような夫婦だった。しかし、あるとき、妻の不満が爆発し二人は口論になってしまう。その後、妻が外出するため、「私」は家で子供達の面倒をみないといけなかったが、「私」は妻と子供達を残して家を出てしまう。逃げた「私」は酒場にいる女友達が出してくれた桜桃を極めてまずそうに食べたのであった。

「子供より親が大事、と思いたい。」がずっと私から離れない理由は、私がまだ子供だからなのかもしれない。子供は心のどこかで親に大事にされて当たり前だと思っているのではないだろうか。実際に私自身もそう思っているし、親になってもその考えは変わらないと思う。親から生まれる子供を大事にしないのは無責任だと思うからだ。しかし「私」、すなわち太宰は違う。「虚勢みたいに眩く」のは自分の弱さを隠すためだと考える。子供が大事、と思いたい仕事も上手くいかず、ヤケ酒に浸るぐらい自分のことで精一杯だった太宰には子供より親が弱い存在に見えたのだろう。『桜桃』を発表した当時、太宰には七歳の長女、四歳のダウン症の長男、一歳の次女がいた。作中にも登場しているのだが、長男は原因不明の病気で「私」はそれを発育が遅れているだけであってほしいと願っていた。この頃はまだダウン症というものが正式になかったため、長男が未知の病気にかかっているかもしれない不安が余計に太宰の心を揺さぶったのではないだろうか。このようなことを考えていくと、最初は「私」や太宰を自分のことしか考えず亭主失格だと思っていたが、親としての引け目を感じていて、尚且つこの時代では妻が家のことをすることが当然だということに育児や家事を一切しないことに罪悪感を覚えていることから、当時にはない現代的な考えができていた人なのだなと思った。

桜桃を極めてまずそうに食べたのはどうしてだろうか。私は、そこにも親としての引け目があったからではないかと思う。桜桃を食べたことがない子供に持って帰ってあげたいが、家を飛び出し、妻に負担をかけているというのに子供に桜桃を渡しても堪えられない気まぐさが夫婦間に漂う気がしてしまう。だから、ヤケ酒をするように弱い自分を自己防衛するため、本意ではなく桜桃を食べたのではと考える。

『桜桃』を読み解いていくうちに、親と子供どちらが大事か、ではなく、どちらも大事で親も自分の身を削ってまで子供を大事にする必要はないのではないかと思えた。確かに子供が成長するまで大事にして守ってあげることも親としての責任だと思っている。しかし、本当に幸せな家庭というのは両者が等しく大事にされている家庭を指すだろう。だから、大事に育ててくれた母のことを私ももっと大事にしないといけないなと思った。そのような大切なことに気づかせてくれた『桜桃』を読んでよかった。

『罪と罰』 フョードル・ドストエフスキー 著 工藤精一郎 訳

平凡と非凡

情報工学科1年 鄭 佳音

ラスコーリニコフが、人を殺した。ラスコーリニコフは元学生だった。人は、高利貸しの老婆であった。

筆者ドストエフスキーによる「罪と罰」を読んだ。主人公の名はロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフ。母と妹をもつ元大学生である。彼にはある思想があった。すべての人は凡人と非凡人に区別され、選ばれた非凡人は、新たな発見、世の中の成長のためであるならば、社会道徳を踏み外す権利を持つ。そして自分も、その非凡人のうちの一人だと。そして彼は人を殺した。殺したのは高利貸しの老婆アリョーナ・イワーノヴナ、更に、彼女の妹リザヴェータ・イワーノヴナである。アリョーナの殺害が計画的だったのに対し、リザヴェータのそれは全くの偶然であった。アリョーナの現場を、彼女に目撃されてしまったのである。こうしてラスコーリニコフは一晚の内に二人も殺した。予期していなかった殺人もあった。偶然にも完全犯罪を成し得た彼に待っていたのは、深く重い罪の意識だった。

さて、先程述べた思想は、彼が大学生だったときに論文として書いたものだ。つまりこの考えは元来より彼の根本にあるものであり、殺害理由は全く別のところにあるのである。彼は、一つの微細な罪悪は百の善行に償われるという理論のもとに、それを実行した。このところでいう罪悪は老婆の殺害、百の善行は老婆によって苦しむ人たちの解放である。事実、老婆に苦しんでいる人は少なくなかった上、彼もそのうちの一人であった。しかしその晩になると彼は心優しきリザヴェータまで殺しているではないか。そうならば彼を救ってくれるのは彼の根本にある思想、つまり、一番初めに述べた思想だけだったのである。

私はこの、彼の思想について述べていきたい。結論から言おう。私は反対である。というか、反対せざるを得ないのだ。彼の思想を整理すると、人は凡人と非凡人に区別される、非凡人は世の中の成長のためなら罪を犯す権利を持つという、この二つである。もし仮に、人が平凡と非凡に区別されるとしよう。そうならば、次に自身がどちらかを考えなければならなくなる。非凡人であれば、罪は許されるのか。そんな訳がないだろう。私は真っ先にそう考えた。しかし、この考えこそが私を平凡たらしめる考えなのではないか、私はやはり平凡に区別されるのではないかと、とも思ったのだ。自らが平凡だと知った今、非凡に殺されることを許すはずもない。つまり、私は反対する他ないのだ。しかしこの本の面白いところは、ラスコーリニコフが自らを非凡の側の人間であると主張するのである。だからアリョーナも、リザヴェータも、彼の中では仕方がないになるのだ。読んでいて、彼の考え方に共感を寄せる箇所がいくつもある。痛々しい感情を抱え、狂ったような言動さえも彼に共感してしまう。結局彼自身は、選ばれた非凡人だと主張するただの凡人に成り下がる。そのことを彼自身も察してくるのだ。そのときの彼の絶望ははかりしれないのだろう。

もし、人が平凡と非凡に区別されるのであれば、私は間違いなく平凡だろう。しかし中にはラスコーリニコフのように、非凡であると信じる仕方がない平凡もいるのだ。平凡も平凡の中で考え、伝え、信じ、裏切られ、それでも彼に共感を寄せ、面白いと感じてしまう。つまるところ、私も非凡人であると夢見る仕方がない凡人のうちの一人なのだ。

『河童』 芥川龍之介 著

河童の目で 「河童」 を読んで

物質化学工学科1年 原田 綾音

芥川龍之介が望んだのは、河童の国のような世界だったのだろうか。河童の国は人間の国とは全く違っている。出産、遺伝、恋愛、検閲、法律、宗教…。人間社会に存在する様々な要素は、河童社会にも存在する。ただ、それらに対しての捉え方が両者で異なる。真逆と言ってもいいほどだ。人間社会で生きているせいか、私は初め、河童社会での常識が正常には思えなかった。しかし、河童達の言い分を聞いていると、妙に納得してしまった。私は芥川龍之介に河童の国を、彼が望んだかもしれない世界を納得させられた。

わたしが一番衝撃だったのは、河童の国の法律だ。河童の国には「職工屠殺法」が存在する。文明の進んだ河童の国では、新たな機械が続々と生まれ、人手の要らなくなった製造会社は職工を解雇する。解雇された大量の職工達は皆、有毒ガスで殺され、食用の肉になる。何て残酷で非人道的なのだろう、と最初は思った。しかし河童はこう言った。

餓死したり自殺したりする手数を国家的に省略してやるのですね。

あなたの国でも第四階級の娘たちは売笑婦になっているではありませんか？職工の肉を食うことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ。

これを聞くと、やはり正義とは思えないが、どこか理に適っているように思ってしまう。私がこれを実際に言われたら、言い返せずに黙ってしまうだろう。

また、河童の子供は母親のお腹の中で、この世に生まれるか否かを選択することができる。人間の男は河童に産児制限の話をして、「両親の都合ばかり考えているのは可笑しい」と笑われた。人間は親が産むと決めたら生まれるし、産まないと決めたら生まれてくることができない。確かに子供は、親の都合に振り回されているようにも見える。産まないほうが将来の子供のためということもあるだろうが、それに子供の意見は本当に含まれているのだろうか。子供が生まれたいと思っていることはないのか。そう考えると、私は河童の言い分にも頷けてしまうのだ。

人間社会とかけ離れた河童社会は、人間から見るととても変に見えるだろう。でも、河童の目にも人間社会は変に映る。河童達の言葉を受け取った私の目は、人間より河童に近いものになってしまった。人間社会が完全に正しいとも、河童社会が完全に正しいとも思わない。しかし、芥川が河童の目を通して伝えた人間社会への批判には、考えさせられるものがある。人間社会の中に居て、常識を常識だと思い込み、それが正しいと思っていた私は、一度考えてみるということをしてこなかった。でも、この話を読んで人間とは真逆な河童の意見を聞くことで、芥川が投げかけた問題について考えることができた。人間社会にいる一人間としてではなく、人間社会の外にいる、河童としての視点で考えた。芥川はこの人間社会を、いつも河童の目で見ていたのだろうか。私には芥川のようにいつも河童の目を持つことはできない。でも、時々一度立ち止まって、河童の目で見つめ直すことをしようと思う。そうすれば、今までの常識が、全て正しいものではないと気付くことができるから。